

教育啓発特定事業の実施に関するガイドライン

実施マニュアル（バリアフリー教室編）

< 目 次 >

第1章 教育啓発特定事業について

第2章 実施マニュアル（バリアフリー教室編）	1
2-1 バリアフリー教室の意義と目的	2
2-2 バリアフリー教室の進め方	3
2-3 企画におけるポイントと留意事項	4
2-4 具体的な実施方法	11
2-5 フィードバック	15

第3章 実施マニュアル（まち歩き点検等編）

第4章 実施マニュアル（シンポジウム・セミナー編）

第5章 実施マニュアル（適正利用等の広報啓発編）

第2章 実施マニュアル（バリアフリー教室編）

2-1 バリアフリー教室の意義と目的

【主な対象】

●市町村担当者

バリアフリー教室は、地域住民や施設管理者と障害当事者等が一体となり、日常生活や社会活動における社会的障壁を体験すること等を通じて、障害の社会モデルや共生社会において必要な配慮等について考え理解を深める体験型のイベントです。



ここがポイント💡

- 👉 バリアフリー教室は、子どもから大人まで、また行政や公共交通事業者の職員等も含め、多様な参加者が高齢者や多様な障害者等の日常生活や社会活動における社会的障壁（バリア）に関わる体験を通じて社会的障壁について気づくことが重要です。
- 👉 体験型のイベントを通じて、社会的障壁によって人々に生じている困りごとや痛みを感じ、障害はどこにあるのか（障害の社会モデル）や共生社会において必要な配慮等についての理解を深めることが目的です。このような目的を達成するためには、バリアフリー教室として体験型イベントを実施するだけでなく、事前や事後の学習との連携を図りつつ理解を深めることが必要です。

◆ バリアフリー教室の実施について

これまでも「心のバリアフリー」について疑似体験等を通じて理解するためにバリアフリー教室が実施されてきましたが、バリアフリー教室は事前や事後の学習とも連携しつつ、**多様な障害当事者等の日常生活や社会活動における社会的障壁（バリア）を疑似体験等により実際に体験し、「心のバリアフリー」についての理解を深めるために有効な取組**です。また、令和2年のバリアフリー法改正により新たに位置づけられた「教育啓発特定事業」としてこのような取組を実施することにより、**関係する施設管理者や学校等と連携しつつ、計画的にバリアフリー教室等を実施**することができます。

※これまで小中学校等と連携したバリアフリー教室が多く実施されてきましたが、本マニュアルでは、多様な参加者による体験型の取組を「バリアフリー教室」として記載しています。

◆ 本マニュアルについて

本マニュアルは、バリアフリー教室の実施に関し、企画、実施、フィードバックの各段階における進め方・留意点を事例とともに整理し、体験型で社会的障壁とバリアフリーに関する理解を深めるためのバリアフリー教室の**標準的な手法等を示すもの**です。

本マニュアルの実施手法を参照しつつ、ハード面におけるバリアフリーの進捗状況や地域の実状（障害当事者のニーズ等）に応じて、**創意工夫を凝らした多様な取組**が実施されることが期待されます。

なお、バリアフリー教室としては、いわゆる「疑似体験」が広く実施されています。本マニュアルでは、障害や社会的障壁を疑似的に体験することにとどまらず、社会的障壁やその解決方法を共感的に理解する取組を「疑似体験」と表記しています。

2-2 バリアフリー教室の進め方

【主な対象】

- 市町村担当者 ●事業実施主体
- 施設管理者・学校等の連携主体

◆ バリアフリー教室の実施手順の全体像

バリアフリー教室は、**企画、実施、フィードバック**の流れで進めることが一般的です。企画の検討は、関係者・学校等との調整や現地の事前確認等のさまざまな準備を行うことを想定し、**実施日の2～3ヶ月前**に始めることが望ましいと考えられますが、バリアフリー教室を過去に実施した経験等に応じて準備期間を短縮することも考えられます。

また、バリアフリー教室として体験型学習を実施するだけでなく、**事前や事後の学習との連携**を図りつつ理解を深めることが必要となります。

バリアフリー教室の企画からアウトプットまでの流れの例

事前の学習

バリアフリー教室

企画 (実施日の2～3ヶ月前)	・ バリアフリー教室の企画の検討 実施機会と対象者の確認 実施メニューの決定 実施に向けた詳細な事項の確認 (実施場所、役割分担、関係者との連携等) その他、企画段階での留意事項 ・ 会場、車両等の確保 ・ 交通事業者への依頼 ・ 安全対策 ・ 感染症対策 ・ プレス発表 ・ その他の準備
実施	・ バリアフリー教室の開催 (教室の運営以外にも、ケガの防止や感染対策などに注意を払います。)
フィードバック	・ 当日の振り返り ・ 課題点は改善し、次回のバリアフリー教室に活かします。

事後の学習

2-3 企画におけるポイントと留意事項

【主な対象】

●市町村担当者 ●事業実施主体

バリアフリー教室の実施手法を検討する段階では、主に参加対象者に応じた体験型学習の実施内容、フィードバックの内容等について検討する必要があるとともに、より理解を深めるための事前や事後の学習との連携についても検討します。



ここがポイント💡

- 👉 どのような機会に、誰を対象に行うのかを確認・整理する必要があります。
- 👉 これまでのバリアフリー教室は、主に小中学校の児童生徒を対象に、車椅子使用者や視覚障害者の疑似体験、介護体験等が行われてきましたが、これに加えて、高校生、大学生、一般の大人の方、行政や公共交通機関の職員など幅広い層を対象者として、高齢者や障害者等の日常生活や社会活動を疑似体験する等のバリアフリー教室を行うことも有効であり、対象者に応じた体験内容等を検討する必要があります。

【実施機会と対象者の例】

- ・学校の授業の一環として、小学〇年生を対象に行う。
- ・大学における専門教育の一環として、〇〇研究室の学生を対象に行う。
- ・行政や公共交通事業者の職員の研修の一環として、〇〇を対象に行う。
- ・文化施設（美術館、図書館等）でのイベント開催時に、参加者を対象に行う。

◆参加者の決定

実施するバリアフリー教室の内容に応じて、高齢者、障害者（車椅子使用者、視覚障害者、聴覚障害者、内部障害者等）、妊産婦、子育て世帯、地域の大学の学生（例えばボランティアサークル）等の**多様な参加者**とすることが望ましいと考えられます。

また、行政・公共交通事業者の職員等の**対象者の属性に応じて、理解度や必要性を勘案しつつ適切なプログラムを提供**することが必要となります。これとともに、広く参加者を募集する際には、地元の障害当事者等の多様な対象者に積極的な参加を呼び掛けることも有効です。

学校連携教育事業として実施する場合のポイント

- ○小中学生を対象としてバリアフリー教室を実施する場合には、学校の授業において実施する場合、時間の延長等が困難な場合がほとんどです。参加する児童生徒が予定していた体験学習を時間内に終わることができるよう、スケジュールに余裕を持たせる、班編成を工夫する等の対応が必要となります。
- ○小学校低学年を対象にする場合には、集中力が続かないため、所要時間を短くする（授業の1コマの時間で実施する等）といった工夫も考えられます。
- ○市町村の教育委員会や福祉部門等が主体となって企画する方法のほか、地域の社会福祉協議会、障害者団体等が作成する学習プログラムを活用する方法など、各学校の環境にも応じて効果的な方法を検討することが可能です。

◆ 実施内容の設定

● バリアフリー教室の構成

バリアフリー教室は座学、体験、フィードバックにより構成されることが一般的です。想定する所要時間や対象者の年齢・体力、バリアフリーに関する理解度等を踏まえ、バリアフリー教室の構成を検討します。対象者の理解度に応じて、また過去の実施の経験を踏まえ、より多様かつ高度な内容とすることも考えられます。

● 所要時間

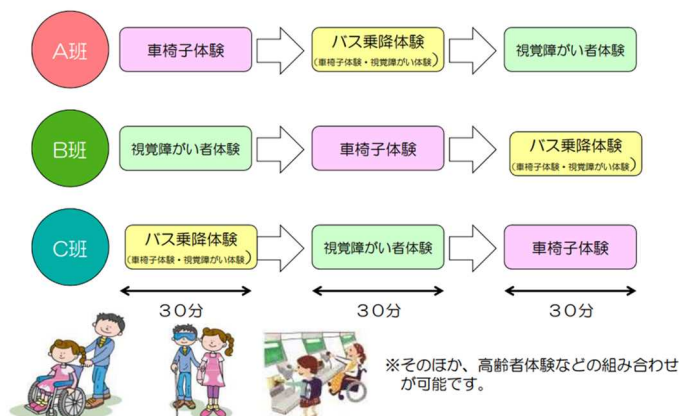
実施する内容によっても異なりますが、いずれの対象者の場合でも、2時間～3時間程度の所要時間を見込む必要があります。バリアフリー教室では、限られた時間の中で様々な体験メニューを実施するだけではなく、座学や事前・事後の学習も含めて、参加者が体験した内容を学べるような構成とすることが重要です。

● 事前や事後の学習などとの連携

バリアフリー教室以外の事前や事後の学習との連携を図り、十分な理解が得られるように留意が必要です。

● 班編成

参加者（特に子供、高齢者、障害当事者等の参加者への配慮が必要となります）の特性等に留意し、班編成を考慮したり、体験に違いを設けることなども考えられます。



学校連携教育事業として実施する場合のポイント

○小学校や中学校でバリアフリー教室を実施する場合、「疑似体験の機会を提供する」ことを重視するあまり、単に「楽しかった」といった経験や感想にとどまることがないように、当日に講義の時間を設けることや、事前・事後の学習と連携を図ったりするなどの工夫を行う必要があります。

● ○例えば、所要時間が十分に確保できない等の支障が想定される場合には、体験学習のみを実施するのではなく講義と講演のみを実施することや、体験学習の経験を事前や事後の学習で十分にフォローするなどその場限りでの体験とならないような対応が必要となります。

○バスやUD（ユニバーサルデザイン）タクシーの乗降体験などで場所を変えて外に移動しなければならない場合には、移動時間も考慮することが必要です。

○体験学習では、参加者全員がすべての体験を実施することが望ましく、例えば体験の際に待ち時間が無いように、必要に応じて班編成をした上で、複数の体験を並行して実施するなどの工夫が効率的な取組につながります。

◆ 事前や事後の学習との連携

バリアフリー教室を「心のバリアフリー」に関する適切な理解につなげるためには、**事前や事後の学習と連携**し理解を深めることが必要となります。**事前や事後の学習にあたっては内容に応じて適切な専門家の支援を得る**ことも考えられます。

事前学習に活用可能な参考資料（心のバリアフリー、障害の社会モデル等）

「心のバリアフリー」を学ぶアニメーション教材（内閣官房、平成29年）

障害者など異なる条件を持つ多様な人々とコミュニケーションをとる際に、知っておきたい知識や心の持ち方を、分かりやすく学ぶことができる入門教材です。

『メッセージ編』、『「バリア」とはなんだろう？』の2部構成になっています。



URL (https://www.kantei.go.jp/ip/singi/tokvo2020/suishin_honbu/udsuisin/program.html)

ユニバーサルデザインの街づくりとバリアフリーの推進（国土交通省、令和3年）

交通バリアフリー法制定から20年が経過し、これまでのバリアフリー化の成果及び「心のバリアフリー」や「当事者参加」等の今後の課題を示したバリアフリー広報啓発パンフレットです。



URL (https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/barrierfree/sosei_barrierfree_tk_000011.html)

こころと社会のバリアフリーハンドブック（国土交通省、令和元年）

主に中学生を対象とした、「障害の社会モデル」を習得し、心のバリアフリーについて学習するハンドブックです。

ハンドブックを用いた授業用として、解説や補足資料を追加した教師用解説書もあります。



URL (https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/barrierfree/sosei_barrierfree_tk_000011.html)

心のバリアフリーノート（文部科学省、令和元年）

児童生徒が「心のバリアフリー」に関する理解を深めることができるように作成された資料です。

「小学生用」と「中高生用」の2種類があり、それぞれ指導者用の解説書もあります。



URL (https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1394142.htm)

公共交通事業者の主催するイベントにおけるバリアフリー教室の開催事例

<国土交通省北陸信越運輸局>

令和元年9月に新潟交通(株)の主催、(公社)新潟県バス協会、新潟交通観光バス(株)及び万代シティ商店街振興組合の共催による、一般の来訪者を対象とした万代シティバスまつり2019にバリアフリー教室を出展しました。『高齢者疑似体験』及び『車椅子でのバス乗降体験』からなる『バリアフリー体験コーナー』を設置し、約120名が参加しました。



交通バリアフリー教室当日のタイムスケジュールの事例

<八街市地域公共交通協議会、国土交通省関東運輸局>

- 実施時期：平成30年1月 ○実施場所：八街市立小学校
 ○対象者：小学4年生50名
 ○テーマ：「バスの乗り方・交通バリアフリー教室」として、以下の2つの内容を実施しました。

①バスの乗り方教室

普段バスに乗る機会の少ない子供たちに「バスの乗り方」等を学んでもらう。

②交通バリアフリー教室

車椅子体験及び視覚障害者の疑似体験を実施。

○班編成：参加者を2つの班に分け、2つのテーマの体験を並行して実施しました。

【当日のタイムスケジュールの事例（複数のテーマを並行して実施した事例）】

時 間		4年1組 25名	4年2組 25名
9:30 ↓ 9:45	15分	開 会 オリエンテーション (@体育館)	
9:45 ↓ 9:55	10分	インターバル（休憩、会場の移動等）	
9:55 ↓ 10:15	20分	バスの乗り方教室 (@駐車場)	車椅子利用体験 (@体育館)
10:15 ↓ 10:35	20分	バス乗降体験 (@駐車場)	視覚障がい疑似体験 (@体育館)
10:35 ↓ 10:55	20分	インターバル（休憩、会場の移動等）	
10:55 ↓ 11:15	20分	車椅子利用体験 (@体育館)	バスの乗り方教室 (@駐車場)
11:15 ↓ 11:35	20分	視覚障がい疑似体験 (@体育館)	バス乗降体験 (@駐車場)
11:35 ↓ 11:45	10分	インターバル（休憩、会場の移動等）	
11:45 ↓ 12:00	15分	ま と め 閉 会 (@体育館)	

事前学習と体験学習を2日間に分けて実施した事例 <国土交通省神戸運輸監理部>

国土交通省神戸運輸監理部が令和2年10月に市立中学1年生（64名）を対象に実施したバリアフリー教室では、1日目にバリアフリーについての事前学習（心のバリアフリーとは何か？どのようなところにバリアがあるのか？についての集合学習）を実施し、2日目に体験型バリアフリー教室（車椅子利用者の疑似体験・介助体験、ノンステップバスの乗降体験（疑似体験・介助体験）、視覚障害者の疑似体験・介助体験、まとめ）を実施しました。

（1日目）事前学習



（2日目）疑似体験



◆実施場所や役割分担の確認

想定する対象者や体験する内容等を踏まえ、**実施場所を検討**するとともに、会場での**ルート、人員配置**などについても詳細な検討を行います。行政や公共交通事業者の職員を対象とする場合には当該施設、小中学校の児童生徒等を対象とする場合には学校が基本となると考えられますが、連携する組織と調整しつつ、体験の内容等も踏まえ、可能な限り参加者の移動の負担が無い場所を設定することが望ましいと考えられます。

なお、**実際の駅施設、電車、バスなどの輸送施設を利用**することで、より障害当事者等の生活体験に近い体験学習の機会を提供するとともに、駅施設や車両の様々なバリアフリーへの配慮や工夫について知ってもらうことも有効です。

当日は、会場準備、座学や体験の講師及び講師の補助、タイムキーパー、撮影・記録等の対応が必要となるため、**事前に役割分担を決めておく**必要があります。

特に講師については、市町村のバリアフリーの取組に知見のある**障害当事者団体、社会福祉協議会、地域で活動するNPO 法人等と連携**し、また例えば、**事業者が実施する場合には障害当事者である職員**等を講師として迎えることで、それぞれの立場からの日常生活の困りごと等について体験を交えつつ学習することができます。

学校連携教育事業として実施する場合のポイント

- ○小学校や中学校で「バリアフリー教室」を行う場合には、体育館、学校の校庭、学校の教室等を利用することが一般的です。
- ○体験を行う場所と、座学とフィードバックを行う場所が異なる場合には、**実施場所への移動**についても考慮が必要となります。
- ○バスやタクシーの乗車体験を行う場合には、バスやタクシーを配置する場所があるかについても検討しておく必要があります。
- ○地元の障害当事者団体等の協力により、障害当事者を講師として迎えることにより、**児童や生徒と当事者との間にコミュニケーションが生まれ、「心のバリアフリー」の意識が自然に芽生えることが期待**できます。

◆会場等の確保

座学や体験の場とする施設については、**実施当日に立入りが可能な範囲や施設管理者の同行の必要の有無、当日の実施工程等について、事前に施設管理者と十分に調整**を行うことが必要です。特に、鉄道駅の改札口やホーム等を利用する場合には、鉄道利用者の支障とならないよう十分に注意することや、列車接近時の対応（安全確保）などさまざまな留意点があるため、鉄道事業者等と十分な調整が必要です。

また、座学を行う会場と体験を行う現場が異なる場合には、**移動手段の検討**が必要となります。車椅子使用者が参加する場合は、必要に応じて移動用の福祉車両等の手配が必要になることや、疑似体験用の車椅子の運搬等、車両が必要な場合には、事前に確保しておきます。

あわせて、**天候不順等の場合の順延の対応（連絡方法や順延スケジュールの確認）**など事務的な内容についても確認しておきます。

◆ 多様な関係主体との連携

多様な関係主体の積極的な参加を促し、事業実施後の各関係者の障害理解の取組・実践を進める観点から、障害当事者団体等のほか **関係協議会や関係機関等と連携** することが有効です。また、事業実施にあわせて **広報活動等** を行う事例もみられます。

【多様な関係主体との連携に関する実務的な対応】

☞ 関係者との調整

バリアフリー教室の開催を企画する段階では **早期に関係者間で実施目的・内容等** について調整を始めます。必要に応じて、実施の1ヶ月前から数週間前にかけて関係者が現場で具体的な実施手法等を確認し、共有することも有効です。

体験にあたり公共交通事業者の協力が必要な場合（バスやタクシーの乗車体験、鉄道駅での体験等）は関係事業者の協力を得る必要がありますが、例えば公共交通機関の利用促進につながる体験（バスの乗り方講習等）も行うことも考えられます。

☞ 専門家等の支援

効果的なバリアフリー教室を実施し、「心のバリアフリー」に関する理解に適切につなげるためには、企画段階において、**実施目的に応じた適切な専門家等の支援を得ることが必要**です。専門家の選定にあたっては、「心のバリアフリー」等に関する知識・経験はもちろんですが、地域との関係性等も考慮して選定する必要があります。また、バリアフリー教室の実施についてノウハウのある国土交通省各地方運輸局等や **「バリアフリープロモーター制度」を活用** することも有効です。

この他にも、作業療法士や理学療法士等といった多様な専門家との連携が考えられます。特に作業療法士や理学療法士は特別支援学校等や小中学校等と連携して学校教育に携わっている方もおり、作業療法士は子供たちの教育活動参加に関する提案や指導の実施、理学療法士は肢体不自由児を中心に移動に関する指導等を行うなどの役割を担っており、医療・福祉の関係からアドバイスやお話をいただくことが考えられます。

☞ 障害当事者等の参画

企画検討の早期の段階から、障害当事者等が参加することが有効な取組につながります。また、バリアフリー教室の当日は、必要に応じて、**障害者の介助者、手話通訳者等の参加・協力、筆談ボード等の参加する当事者が意見を言いやすい環境づくり** にも留意が必要です。

DVDを作成して配布するとともにWEBでの意見交換を実施した事例

<国土交通省北海道運輸局>

○開催時期：令和3年3月

○会場：北海道運輸局 旭川運輸支局 会議室

○参加者：WEB意見交換会 / 一般社団法人 稚内観光協会 1名

※DVD教材配布による事前学習 / 各地区観光協会、旅行業者 21名

○協力：特定非営利活動法人旅とびあ北海道 / カムイ大雪バリアフリースターセンター

○実施概要：コロナウイルスの感染拡大に伴い、会場に参集し疑似体験等を行う従来の開催方法が困難なことから、**障害当事者の「宿泊施設利用実態」や、観光案内の際における「接遇マニュアル」等を収録したDVDを作成し、従来の開催エリアを広げることも視野に入れ、管内の観光協会や旅行会社に配布し、アンケート形式にて意見・質問等を収集。**

その後、希望により抽出した1カ所とWEB形式で意見交換を行うとともに、集約した全アンケートに対する回答を作成し、各参加者への共有することで、観光案内業務における「心のバリアフリー」への理解を深めた。

○参加者の感想（DVD視聴者から）

- ・実際の研修も良いが、DVDの場合は繰り返し見る事ができるため教材としても役立つ。
- ・教室への移動の手間もなく、自分の都合の良いときに視聴できるのでとても良い。
- ・不便さはとても伝わってきました。もっと宣伝して多くの方々に知って頂いて助け合いの社会になってほしいです。



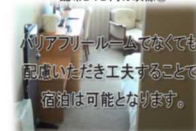
配布DVD内の映像①



配布DVD内の映像②



配布DVD内の映像③



コロナ禍での啓発活動・オンライン版「あすチャレ！ジュニアアカデミー」活用事例

<国土交通省近畿運輸局>

近畿運輸局ではコロナ禍における小学校等でのバリアフリー教室開催の工夫として、日本財団のオンライン版「あすチャレ！ジュニアアカデミー」を活用しています。

オンライン版「あすチャレ！ジュニアアカデミー」とは、日本財団パラリンピックサポートセンターが主催する、パラアスリートを中心とした講師によるワークショップ型授業です。オンラインでリアルタイムに障害当事者講師とコミュニケーションをとりながら、共生社会実現のために、自分には何ができるか考える内容となっています。

また、あすチャレでは、オンライン講義の方法や、「障害の社会モデル」の子どもたちにも分かりやすい表現での説明方法等の工夫がなされています。

機材一式、ポケット Wi-Fi の無料貸出しに加え ZOOM による操作方法の事前レクチャーを受けることができる他、プログラム内容を 45 分で設定するなど学校教育への取り入れやすさも考慮されています。

教室でのオンライン講義の様子



パラアスリート講師の講義



2-4 具体的な実施方法

【主な対象】

●市町村担当者 ●事業実施主体

バリアフリー教室として実施する座学、体験学習、フィードバックとしては多様な実施内容が想定されるため、参加者の特性に応じて難易度や体験内容を工夫します。



◆ 座学（説明や話を聞く）

幅広い層の参加者向けとして、各種のテーマに関する講話、疑似体験・介助体験に関する事前説明などを行います。

また、幼児には絵本の読みきかせを、小中学生には調べ学習を行うことも効果的です。

座学の内容について

●各種のテーマに関する講話

講話については対象者に応じてさまざまなテーマが想定されるため、参加者の理解度や必要性等に応じて適切なテーマを設定することが重要です。講師については、高齢者や障害当事者、有識者等が想定されます。

また、市町村のバリアフリーの取組に関わる高齢者や障害当事者団体等の協力を得て、高齢者や障害当事者等からその方の立場から見た日頃の困りごとなどについての講話も効果的です。

※バリアフリー教室では、各種のテーマに関する講話の時間を設けることが望ましいですが、その時間が無い場合には、バリアフリー教室とは別に、事前や事後の学習と連携を図ることが必要です。

講話のテーマの例

分類	テーマの例
バリアや心のバリアフリー等に関わる基礎的なテーマ	・心のバリアフリーに関する講話 ・障害の社会モデルに関する講話 等
高齢者や各種の障害の特性等に関わるテーマ	・高齢者からの講話 ・肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、発達障害等に関する講話 等
そのほか関係するテーマ	・補助犬に関する講話 ・ベビーカー利用やベビーカーマークに関する講話 ・子ども用車椅子（バギーカー）に関する講話 等

●疑似体験・介助体験に関する事前説明

バリアフリー教室での体験に先立ち、その目的、関係するバリアフリーに関わる内容、体験の具体的な方法や注意点等について説明します。

●絵本の読みきかせ

小中学生を対象とする場合には、絵本に描かれた物語を通して、障害等の理解とバリアフリーについて伝える例も見られます。

学校連携教育事業として実施する場合のポイント

- 調べ学習（主に小中学生向き）
調べ学習としては、「専門図書を使った学習」、「事前に校内や学校周辺にある様々なバリアについて調査し、その状況について発表して解決策について考える学習」などが想定されます。

◆ 体験（疑似体験等）

体験には、主に以下のようなメニューがあります。

- ・車椅子使用者、視覚障害者、高齢者等の疑似体験、介助体験
- ・手話講座
- ・ふれあい教室
- ・まち歩き
- ・バリアフリーのものづくり 等

なお、体験等のメニューを検討する際には、車椅子使用者、視覚障害者の疑似体験・介助体験だけではなく、その他の例えば見えにくい障害の当事者や、高齢者、妊産婦、幼児など、社会には様々な方がいることを参加者が知り深く理解するとともに、多様な体験ができるように留意することが望ましいと考えられます。

体験（疑似体験等）の内容について

●車椅子使用者、視覚障害者、高齢者等の疑似体験、介助体験

高齢者や障害当事者等の疑似体験、介助体験を行い障害当事者等にとってどのような社会的障壁があり、どのように解決することができるか、自分自身の行動が障壁となっていることがないか等について、気付きを得ることも大きな意義の一つです。なお、疑似体験だけではなく、あわせて介助体験も行うことで、理解を深めることができます。

疑似体験、介助体験の例

分類	内容の例
車椅子使用者等の肢体不自由者の疑似体験、介助体験	・ノンステップバスを使用した車椅子の乗降体験、介助体験等
視覚障害者の疑似体験、介助体験	・白杖を使用した視覚障害者誘導用ブロックの歩行体験、介助体験等
高齢者の疑似体験、介助体験	・視覚、聴覚、運動能力を制限する特殊な器具を装着し、駅等の施設を実際に利用する体験、介助体験等

●手話講座

手話講座を行い、聴覚障害の方とのコミュニケーションについて学びます。

●ふれあい教室

高齢者、障害当事者、乳児等とのふれあいの場を設けます。

【ふれあいの場の例】

- ・保育園児交流会
- ・小中高専門学校生が就労支援施設等を利用する障害者と交流 等

●まち歩き（詳細は、第3編の『実施マニュアル（まち歩き点検等編）』を参照してください。）

高齢者、障害当事者等と一緒にまちを歩いて、バリアとバリアフリーを体験しながら理解を深め、バリアフリーのまちづくりについて考えます。

●バリアフリーのものづくり

身近に使うものを対象に、バリアフリーに配慮したものづくりを、提案から実際の製作まで行います。

多様な体験学習の事例（聞こえない体験会） <一般社団法人福岡市ろうあ協会>

○目的

「聞こえない体験会」は、生活の中で誰もが使う場所（コンビニ、銀行、病院、道路など）で、全く音が聞こえない事がどのくらい不便なのか、そして、ろうあ者が、日々どのくらい疎外感を持ちながら生活しているのかを実感できる体験です。

○内容

聞こえない体験

ろう者の体験談（手話で）

どのようなときに不便な体験をしたのか（実体験）

困ったときには、まわりの人にどのように支援して欲しいか

プチ手話レッスン（あいさつや名前の表現）

過去の開催概要

10分	オリエンテーション ・開会あいさつ ・講師紹介 ・今日の流れ、注意事項の説明		
	赤グループ	青グループ	黄グループ
15分	「聞こえない体験」 ・耳カバーとヘッドホンを装着 ・コンビニで買い物体験 ・病院の受付体験 ・ヘッドホン返却	「テレビ体験」 ・音声だけの映像をみます	「手話体験」 ・ろう講師による手話体験 ・自己紹介ができる程度の手話
	↓	↓	↓
15分	「手話体験」	「聞こえない体験」	「テレビ体験」
	↓	↓	↓
15分	「テレビ体験」	「手話体験」	「聞こえない体験」
	↓	↓	↓
20分	「全員で手話で会話してみよう」 ・手話体験で習った手話を使って、知らない人と自己紹介しあう		
15分	まとめ ・質疑応答 ・閉会あいさつ		

「大川市人権講演会」

- ◎実施回数：6回
- ◎会場：各地区コミュニティセンター
- ◎主催：大川教育委員会生涯学習課
各地区コミュニティ協議会
- ◎協力：福岡聴覚障害者団体連合会
大川手話の会
福岡手話の会
- ◎参加者：大川市民
- ◎参加人数：1回45～60名、合計304名

○体験会の様子



バリアフリー教室の円滑な実施のための実務的なポイント（安全対策等）

疑似体験や介助体験の実施にあたり、安全への適切な配慮のため、必要に応じて専門家（例えば車椅子の利用体験を実施する場合には社会福祉士など）の意見を確認しながら実施するとともに、事故等について保険の適用を確認します。

また、安全への配慮については、通行する車両等に対する安全だけでなく、熱中症や新型コロナウイルス感染症（体験人数の少人数化）等の対策についても留意が必要です。

また、まち歩き点検等の実施当日には、案内者のほかに介助員や手話通訳者を配置する事例や、筆談ボードを準備するなど参加する障害当事者等が意見を言いやすい環境づくりに努める事例があります。

なお、車椅子使用者や白杖の利用者などが参加する場合には、サポート役を用意することや、必要に応じて移動用福祉車両等を手配することも必要となります。

【感染症対策の例】

集合してバリアフリー教室を実施

- 会場の十分な換気
- 体験前後のアルコール消毒剤による手指消毒の徹底
- 参加者同士の接触を避けるため、視覚障害の疑似体験では、介助を省略して簡易な体験とする
- アイマスクなどを使う場合は、共用することを避ける
- 実施場所の人数の制限
- 最大滞在時間の制限（長時間となる場合には入替制）
- 参加者の検温 等

集合せずにバリアフリー教室を実施

- WEBでの意見交換
- 動画の視聴 等

◆ まとめ（フィードバック）

まとめ（フィードバック）には、主に以下のようなメニューがあります。
詳しくは、「2-5 フィードバック」をご覧ください。

- 1) 参加者へのアンケート調査の実施
- 2) 体験後の説明や講話
- 3) 参加者のグループでの意見交換、発表 等

フィードバックの実施

●参加者へのアンケート調査の実施

- ・体験後に、バリアフリー教室で気づいたことなどについて聞くアンケート調査を行うことで、参加者が体験して得た気づきを、自分で整理して深めることが期待できます。

●体験後の説明や講話

- ・体験後に、必要に応じて体験に関わる説明や講話を行うことで、体験についてさらに理解を深めることが期待できます。

●参加者のグループでの意見交換、発表

- ・体験後に、グループでの意見交換、発表、当事者との意見交換等を行うことで、他者の気づきも参考にしつつ、自分の気づきを深めることが期待できます。

観光地におけるバリアフリー教室の開催事例 <国土交通省北海道運輸局>

国土交通省北海道運輸局では、平成31年3月に、小樽観光協会加盟の観光関係者、ボランティア観光ガイド関係者等を対象にバリアフリー教室を実施しました。

障害の有無や年齢、国籍に関わらず、多くの方がまた小樽を訪れたいと思うよう、対応の基礎知識を学んでいたために、車椅子及び視覚障害者の疑似・介助体験を行った後、手話をはじめとした聴覚障害者とのコミュニケーションについて、ロールプレイを実施しました。



2-5 フィードバック

【主な対象】

●市町村担当者

座学、体験により確認した気づきについて、ワークショップやアンケート等により参加者がどのような気づきを得たかを確認するとともに、参加者等の相互理解を深めます。障害の内容等によっても感じるバリアは異なるため、さまざまな視点から振り返りを実施します。



ここがポイント💡

👉 フィードバックにおいては、参加者が意見を言いやすい雰囲気づくりをするとともに、多様な意見について議論し相互理解を深める観点から、可能な限り意見に偏りが生じないように、各参加者に均等に意見を求める配慮や、各参加者が意見を共有できる場が必要です。

👉 気づきについて、良い点、悪い点、考えられる改善策等について、ワークショップやアンケート調査等により整理します。

バリアフリー教室（XX小学校）アンケート

今日のバリアフリー教室を受けての感想を教えてください。

問1 今日の授業で話した内容は分かりやすかったですか？

1. わかりやすかった 2. ふつう 3. わずかしかった

「3. わずかしかった」をえらんだお友達に質問です。
どんなところがわずかしかったかな？

問2 今日の授業を受けて、すぐに「やってみよう！」と思ったものはありますか？

※2つ以上○をつけてもいいよ！

1. 誰かがいる人の気持ちになって考えたい。
2. こまっている人を見かけた時には「お手伝いしましょうか？」と声をかけた。
3. 今日学んだお手伝いの方法を家族やお友達に伝えたい。
4. その他 （自由に書いてね）

問3 バリアフリー教室全体の感想を自由に書いてね！

公益交通利便促進キャラクター「のりたろう」

アンケート調査票の例

バリアフリー教室におけるフィードバックの実施事例 <国土交通省関東運輸局>

○オリエンテーション

- ・参加者への実施内容説明
- ・車椅子・白杖等機器の使用法、介助の基本動作説明

○疑似体験／介助体験 [鉄道駅]

- ・車椅子利用体験／介助体験
- ・視覚障害者疑似体験／介助体験
- ・高齢者疑似体験／介助体験

○鉄道事業者による駅のバリアフリーに関する取組紹介

○グループディスカッション

○まとめ、講評

○オリエンテーション

○疑似体験／介助体験

- ・高齢者疑似体験／介助体験
- ・車椅子利用体験／介助体験

○グループ発表

（体験してわかったこと、難しかったこと、良かったこと）

○質疑応答

○まとめ

○アンケート配布

学校連携教育事業として実施する場合のポイント

- フィードバックの内容を整理したうえで、別の機会に報告会等として、参加者やその他の一般の方に共有することも有効です。
- 例えば、小中学生を対象としたバリアフリー教室を実施した場合には、バリアフリー教室の開催後に学校の懇談会や学校だより等を通じて、子供達の疑似体験実施後の感想や配布されたパンフレット等を対象者の父兄へ共有する等により、対象者のみならず、それぞれの家庭、さらには市民レベルにおける障害の社会モデルや心のバリアフリーに関する正しい理解の促進にも資することとなり、より大きな事業効果の発現が期待されます。
- 体験学習の所要時間が長くなることも想定し、参加者の特性も考慮しつつ当日のスケジュールの検討が必要です。